

上田順平 「Picture of My Life」



うえだ・じゅんぺい
1977年、大阪府生まれ。2003年、ビジュアルアート専門学校大阪写真学科夜間部卒業。2013年、ニコンサロンでの個展「手紙」が三木淳賞を受賞。17年には「BEYOND 2020」で日本の新進作家6名に選ばれ、アムステルダム、パリ、東京で作品展を開く。
<http://junpei-u.com/>

両親の自死を乗り越え、

上田順平さんは21歳の時、母と父が相次いで自死した。明るく幸せな家族だったが、母は更年期障害による鬱病を患い、父は妻を亡くした失意で10日後、後を追った。自殺者は毎年、かなりの数に上る。警察庁統計によると2016年は2万1897人で、同じ年の交通事故での死者数(3904人)をはるかに上回る。

その時、上田さんは友人と海外を旅していた。急遽帰国し、祭壇や遺骨にカメラを向けた時、このことを作品にしようと思ったそうだ。父は

父と母、そして僕の人生を肯定するために写真集を作った



幼い頃から独学で絵を描いていて、その影響から上田さんも一般大学を辞め、芸大を受け直していた。

「父に褒められたアーティストを見るうちに、森村泰昌、荒木経惟の写真集を知り、興味を持ちました」

写真は作者が見た光景を共有する行為だ。その時、彼らの視点、美意識、思想を追体験することができる。上田さんはそこに興味を抱いた。

両親がいなくなった日常を撮ることで、その時にしかない感情を写真にとどめようとした。その後、自分が家庭を持つと、妻と授かった2人の娘、身の回りのことを記録した。時とともに悲しみは薄らいでいく



■上田順平 写真集
「Picture of My Life」
CEIBA刊・9,500円(税込)



が、両親の自死を昇華することはできなかった。一般的に自死は負であり、それを語ることは両親を貶めることにつながるからだ。

「そう思い込んでいましたが、父と母がいかに素晴らしい夫婦で、僕らは幸せな家族だったかを語れば良いと考えるようになりました」



父親は息子に妻が「世界一のべっぴんだ」と何度も自慢をしていた。妻が死んだ後は家族のアルバムを熱心に作り、その作業を終えるまで命を絶つた。

2013年、ニコンサロンで開いた個展は反響もあり、出版社に写真集の企画を持ち込んだ。

「良い返事は一つもなく、悶々としていた時、手作りの写真集が海外のフォトブックコンペで評価されていることを知りました」

その写真家が学んだワークショップに行き、写真キュレーターの後藤由美さんに出会った。それまでは自分が撮った写真だけで構成していた



が、「伝えたいことを表現できるなら素材は何を使っても良い」と指摘されると、物語が大きく広がった。

手製の写真集「Picture of My Life」21部をWEBで販売すると、1部3万円という価格ながら1カ月で完売。イタリアの小さな出版社であるedimも購入者の一人で、同社から写真集を出す話にもつながった。それも50部を制作し、早くも残りは約100部だという。

上田さんは去年11月に写真家として独立。広告などの撮影とともに、依頼を受けて写真集を作る仕事も始めた。時間をかけて、その人のための「Picture of own Life」を作っていく。

「自分の作品では、僕の家族と両親を同居させた本を作ります。死はすべてが無になるのではなく、意識は残る。僕自身が今、そう感じるから、それを形にしていこうと思います」